

07・ストーカー襲来（頼れる年上とは、冷静に危機回避するものである）

06から数日後。一月二十四日（金）十五時ごろ。
すずらん市汐見台。

場所は、スーパーの裏にある、小さなカフェ。

汐見台唯一のおしゃれスポットともいえるそこで、主人公は今、やっぱりスマホで漫画を読んでいる。

読んでいるのは、唯為理の漫画……は、今はちよつと場所的に控えた方が良いので。
昔から好きな作品である。

それは今、漫画アプリで期間限定無料公開中だ。
なので、主人公はこれまで紙版を死ぬほど読み返したにもかかわらず、また読んでいるのである。

今、画面に映っているのは、序盤の山場だ。

主人公の少年が、迫りくる理不尽に、毅然と、冷静に対処するシーンである。

これによって流れは大きく変わり、彼は大きな目的に一步近づくのだ。

彼は作中においてはちよつと地味な男性で、ファンからも『イマイチパツとしない』『もつと活躍してくれてもいい』と言われる事がある。

だが主人公は、まったくそうは思わない。

彼はいつでも、時に自分自身を犠牲にしても、最善の選択を探している。それを感情的にならず実行し、後から『俺かっこいいだろう』と主張する事もなく、淡々とやるので大変格好いい。つまりは、憧れの男性なのだ。

だから、主人公は思う。

自分もこんな風に、絶対に承服しかねるような理不尽に出会ったら……。

その時は彼のように、冷静に乗り切ってみせる！ と。

まあ、悲しい事に自分は彼はかなり年上……どころか、そろそろダブルスコアがついてしまいそうな位、年が離れているのだが……。

と。思っていると、スマホの画面が暗転し、着信画面に切り替わる。唯為理から電話がかかってきたのだ。

SE1 カフェの環境音

【最初から最後まで流す】

【0―5秒ほどまで流してSE2】

【その後、音量をごく小さくして、既定の位置まで流し続ける】

SE2 主人公のスマホの着信音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「もしもしー？」

そう……主人公は今、唯為理と待ち合わせをしているのである！

「【慌てるあまり、ものすごくテンパっている。でも、今までに比べて声が甘ったるい】

あつ。唯為理です♥

【だが、甘い声を出している場合ではない事に気づき、必死で訴える】

もうすぐ終わります。後三十分で絶対仕上げます。

もう少しだけ、お店でお待ちいただけますかっ」

〈主人公〉

「あはは♥ 大丈夫だよ。

原稿頑張って？ 今から読むの楽しみにしてるから」

主人公、穏やかに、にこやかに答える。

対する唯為理、ものすごく嬉しい。

唯為理は今原稿中で、おまけに作業が押しているせいで、主人公を待たせてしまっている。

でも、主人公はそれを責めず、許してくれる……。

大好き……♥

と、思ってしまう。

「嬉しくて言葉が出ない」

あっ……♥

【もはや好意を隠さない】

はいっ！ 原稿頑張ります♥

【ものすごくやる気がわいてくる】

では。終わったらすぐ電話しますので。失礼しますっ」

〈主人公〉

「うん♥ じゃあまたね♥」

こうして、通話は終わるが……。

SE3 主人公が通話終了ボタンを押す音

【最初から最後まで流す】

……ねえ、ちよつと今の、カップルっぽくなかった？

主人公、すでに憧れの彼っぽく振る舞う事をすっかり忘れて、一人ニヤニヤする。
今日は機嫌がいいのだ。

唯為理に会えるし、漫画は好きなエピソードが更新されたし。

さつきスーパーで、また例の変身ヒロインガチャもできたし。しかもダブらなかったし。
が……。すぐに『スン……』と真顔になる。

……いや、ナイナイ。

同性で距離が近くなってくると、ちょっと恋人みたいなノリになる事ってあるよねー。
異性より気安くなりやすい分、むやみにイチャイチャしちゃうっていうか。

そういう二人、めっちゃ見かけるよね。男性同士でも女性同士でも。他の組み合わせもあると思う、うんうん。

アハハ。ちよっとこの前『大好き』って言われたからって、その気になりすぎだよね、わたし！

……アハ。アハハハハ……。

……と、主人公、大げさに否定してみるものの、数秒経つと、またニヤニヤしてしまう。

でも、後三十分位で、唯為理ちゃんに会える……♡

今日もいっぱい、楽しいお話して、おいしいもの食べて、仲良く並んで、歩ける……！
ウへ、ウへへへへ。幸せ。

という事で、ただでさえ『痛い』『落ち着きがない』『こんなアラサーで大丈夫か?』でおなじみの主人公だが、最近はずますますこれらが顕著だ。

唯為理に恋してしまったのだ。

もちろん、わかっている。唯為理の『大好き』にはたぶん、そこまで深い意味はない。単に自分が舞い上がりすぎているだけだと。

だってあの日は、結局そのまま特に何もなかったし。

あの後、よほど道が空いていたのか、おばあちゃんたちはすぐに帰ってきてしまったし。

結局最後まで、主人公は唯為理に、改めて意図を聞く機会を得られなかったのだ。

それに……男性はちよつとどうか知らないが……女性には一定数、気軽に他人に『好き』と言えるタイプの子がいる。

だから、それをいちいち真に受けていたら、人間関係は立ちゆかないのだ。

つかさー昔の滯とかそんな感じだったよ。今とはわりと別人だったよ?

ほら、やっぱ真に受けちゃならん。女の子から女の子への『大好き』は。せいぜい『いつもありがとう』位の意味に受け取っとくのが吉だぜ。

おお、滯の顔を思い浮かべたら冷静になってきた。ありがとう滯。

それでも唯為理との日々は甘く、主人公は最近、こんな風に悩む事さえ幸せだった。出会った当初こそ、唯為理は何か事情のありそうな子に思えた。

今もそれは変わっていないし、おそらくそうなのだろう。

だが、先日的一件事で、おおむねその事情に見当はついた。

唯為理はきつと、人間関係のトラブルで、ずずらん市に休みに来たのだ。

だから、出会った日のあれも『なんか妙だ』と探偵ごっこをしていたけれど……。今思うと、単に、漫画を描くのに忙しくて、疲れてただけなのかな。

と、主人公は思うようになっていた。

しかし、主人公は詰めが甘かった。

探偵女子には憧れていても、探偵の才能には欠けていたのだ。

勘というものは意外な位当たるのに『気のせいだ』と思うようになってしまっていたのである。

そこに……一人の女性が近づいてくる。

彼女は先ほど、主人公とは少し離れた席から、主人公と何者かが電話するのを聞いていた。

その会話に『原稿』という単語が聞こえたので、それが非常に気になったのだ。

だが、主人公は電話の相手と、特に『これからここで待ち合わせしている』とは言っていないかった。

つまり『今原稿を描いている人物』は、待っていれば必ず現れるわけでもなさそうだ。それなら……。

と、考えて、近づいてきている。

SE3から5秒ほど間。

SE4 絢の足音

【最初から最後まで流す】

〈絢〉

「穏やかに、にこやかに。

『理想の大人の女性』『かわいい、ゆるふわお姉さん』という感じで」
「こんにちは」

〈主人公〉

「？ こんにちは」

……およ。美人。

真の『お酒のCMに出てる女優さんみたいな美人』だ！

主人公、突然見知らぬ女性に声をかけられて驚くが、すぐに『道かな？』と思う。
知らない人に道を聞かれるのには慣れているのである。

〈絢〉

「あの、恐れ入りますが……。

少しお伺いしてもよろしいですか？」

〈主人公〉

「なんでしよう……?」

あ。道だわ。これ道だわ。

主人公、完全にそう思い込んで微笑むが……。

〈絢〉

「この辺りに、奥平（おくだいら）さんという方のおうちはございませんでしょうか?」

その言葉で、なぜか顔がこわばる。

理由はわからないけれど、何か、ひやっとするものを感じたのだ。

〈主人公〉

「いいえ……? その方が、何か?」

主人公、少し動揺しつつも、会話を続ける。

スマホを一度ちらりと見て、ついさっきまで読んでいた漫画の、彼を思い浮かべる。

……とりあえず、嘘は言っていないぞ。

この辺にあるのは小湊さんちであって、奥平さんちではないからな。

この人、なんだろう。唯為理ちゃんの知り合い？

……でも、じゃあなんで、唯為理ちゃんちの事を知らないの？

〈絢〉

「【質問する以上は、自分と唯為理の関係を、説明する義務があると感じる】

あ、えっと。

【少し間をあけてから。恥ずかしそうに】

付き合ってる、人なんですけど。

【『お恥ずかしい』という感じで】

ちよつと喧嘩しちゃって……。話したいんですけど、電話にも出てくれなくて。

困ってるんです」

〈主人公〉

「えっと……。それで、直接家に行く事にしたんですか？

「ご自宅の場所、ご存じないんですか？」

主人公、女性が発した『奥平さんという人と付き合っている』という言葉に激しく心を揺さぶられつつも、しばらく様子を見る。

そう、自分は今、あの漫画の彼なのだ。

彼なら、まずは落ち着こうとする。それから、少しでも戦況を理解しようとする。こんなところで、心乱してはいけないのだ。

そう思って、どうにか呼吸を整える。

それに『奥平』って苗字の、全然違う人かもしれないし……。

女性が続ける。

〈絢〉

「【説明不足であった事に気づく】

ああ。実はその子、地元はここじゃなくて。

【唯為理の祖父が亡くなった事を知らない】

おじいさんおばあさんが住んでいるのがずらん市だって、前に教えてもらったんです。

だから、遊びに来ているんじゃないかなって」

んん……？

主人公、不審に思う。

なぜなら、唯為理の祖父は昨年末に亡くなっている。

唯為理と親しい人物なら、この事を知っていてもおかしくないはずだからだ。

少なくとも、唯為理は一か月以上前にはずらん市に来ている。

つまり、この女性が指す『奥平さん』が唯為理である場合、二人はそれよりも前に喧嘩している事になるのだ。

その場合、その間に唯為理の祖父が亡くなり、唯為理はずらん市に行く事になった……。という事になるが、なんだかおかしい。

唯為理の性格なら、突然しばらく家を離れる事になった場合、恋人には、たとえ喧嘩していても……きちんと伝えそうなものだが。

……かまをかけてみよう。

〈主人公〉

「ああ。三人で過ごしてるんじゃないかって、事ですか？」

〈絢〉

「引っかかる」

そうです。三人で過ごしてるのになって。せつかならご挨拶したいですし」

これは、お祖父さんの死を知らない。って事だね。
でも、これじゃ弱いな……。

つか、喧嘩した恋人のおじいちゃんおばあちゃんまでアポなしで行って。

すんなり仲直りするだけじゃなく、そのままおじいちゃんおばあちゃんに挨拶できると
思ってるの？ この人。

そんなちよつとした喧嘩なのに、別の地域からここまで来てるの？

家の場所も知らないのに？

——なんか、変じゃない？

〈主人公〉

「それなら、深刻な喧嘩じゃないんですね。

だったら、もう少し待っていれば、向こうの気持ちも落ち着いて……。電話にも出てくれるんじゃないですか？」

〈絢〉

「はい。深刻な喧嘩ではない。

もうちょっと待ってれば、向こうから電話もかかってくるかも……。

【少し間をあけてから】

私も、そう思うんですけど。

でも、やっぱりちゃんと話を聞いてもらわなくちゃって。

私の気持ち、わかってもらわなくちゃって。

【少し間をあけてから。どこか悲しげに】

これが、最後になっちゃうかもしれないし」

これが最後？ 下手したらこれっきりになる位、深刻な喧嘩してるって事？

あれか？ 転勤が決まってるのか？ いや、別れないなら『最後』にはならないよね。

そもそも『深刻な喧嘩』じゃないんだから、別れの危機ではないんだよね。
この人、何を根拠に『最後』って言ってるんだろう。それ位悲観しやすい人なのかな。
とにかく……やっぱり、ちよつと言ってる事変だな。

〈主人公〉

「大好きなんです。その方の事が」

〈絢〉

「【照れて】

あは……そうなんです。

【うつとりと、心の底から】

大好きなんです」

何がおかしいって。見ず知らずのわたしに、やったら語りたがるっていうのが……。
ねえ？

主人公、女性を不審に思うあまり、思わず黙ってしまう。
すると女性は『さすがにちよつと話し過ぎた』と思ったのだろう。

はにかんだように笑うが、結局話を続ける。

〈絢〉

「【恥ずかしそうに】

すいません。話しすぎちゃいましたね。

【少し間をあけてから。照れて】

自分でも、夢中になり過ぎちゃってるなって、思います。

【落ち着きつつも、真剣に】

だって以前の私だったら、きっと諦めちゃってました。

『喧嘩したらもうダメかな』『価値観が違うなら一緒にはいられないのかな』って。自分を納得させようとしてたんじゃないかな。

【少し間をあけてから】

でも、今回は、そうしたくないなって。

【当たり前のように『彼女』といって、恋人の性別を特定させる】

もう一度彼女に、何が正しいのかわかってもらう機会が欲しいんです」

何が正しいのか、わかってもらう……？

主人公、女性のその言葉にひきつる。

彼女の口ふりは、まるで自分が絶対に正しくて、相手にそれを『わからせてあげる』という態度だ。

主人公はその姿に、とても嫌なものを感じてしまったのである。

あれかこの人。恋人を支配したいタイプか。

好かんすなあ、そういう手合いは。

……いや、いやダメ。『奥平さん』が唯為理ちゃんかもしれないからって、わたし、たった今出会った人に過剰反応しすぎ。冷静になれ。冷静になるのだよ、きみい。

とりあえず『奥平さん』は女性……これは間違いないって事で。

主人公、必死に漫画の彼になりきって、手に入れた断片的な情報から、二人の関係を推理しようとする。

だが、そもそも唯為理は、地元で具体的に何があつたのか、一切主人公に話していない。恋人がいるとも、いないとも言っていない。

主人公が『いない』と思い込んで、唯為理との恋愛を期待しているだけだ。

だから、この人の言う『奥平さん』は唯為理ちゃんの事で、二人は普通に付き合ってたで、痴話げんかして。

怒った唯為理ちゃんがこっちに避難してて、電話にも出なくて。それで、らちが明かないと判断した、この人が追いかけてきた。

……それで筋が通る気がする。

唯為理ちゃんが女性も恋愛対象の子なら、わたしに対して、妙に距離が近いのも納得がいくし。

……でも、それだと今度は佐智さんの態度が変だ。だってあれ、わたしと唯為理ちゃんを接近させようとしてるよね。間違いなく。

十年会ってないから、唯為理ちゃんと、このお姉さんが付き合ってる事を知らないとか？でも、恋人との喧嘩が原因ですずらん市に来たのに。あれだけ仲良さそうなのに、唯為理ちゃんがそれを話してないのも変じゃない？

だめだ、全然わからん。
でも……。

〈主人公〉

「……実はわたし、地元の人間じゃないんです」

この人なんか、おかしくない？ 完全に主観かみだけど変じゃない？
わたしこのまま唯為理ちゃんに『お付き合ひしてる人が会いに来てるよ』って、連絡していいの……？

〈絢〉

「心から申し訳なさそうに」

あら。あなたも地元の方ではなかったんですね。

ごめんなさい。なのに私ったら一方的に」

そうだそうだそうだ。冷静になれ。冷静になるのだよ、わたしい。

人を簡単に『*****』なんじゃないかって疑うなんてね。いけないよ、うん。

わたしよ。わかってるのかい？

〈主人公〉

「でも、祖父母がこの辺に住んでいて。祖母がもうすぐ来てくれるんですよ」

〈絢〉

「『それでは『原稿』を書いているのは祖母だったのか?』と、内心少し動揺する」
えっ? ああ。さっきお電話されてた方ですか?」

〈主人公〉

「そうです。」

その人にかけてみるので、ちよつと待ってただけですか?」

〈絢〉

「【心から感謝して】

ありがとうございます……!」

お知り合いに、電話で確認してただけるなんて、助かります。
では、お待ちしますね」

わかってるけど変だわ。この人なんか変だわ。

冷静な判断じゃないのはわかってる。

でもわたし、この人を唯為理ちゃんに会わせたくない。

——だってこの人が、唯為理ちゃんのストーカーとかだったらどうするの。

〈主人公〉

「はい、じゃあちよつと向こうで電話して来ますね」

SE5 主人公が席を立つ音

【最初から最後まで流す】

主人公、こうして笑顔を貼り付けて、その場から離れようとするが……。それは、すぐに引きはがされる。

〈絢〉

「【まるで、わざと見せびらかすように】

あ。そうだ。写真があるんです」

SE6 絢がスマホを取り出し、画面を見せる音

【最初から最後まで流す】

〈絢〉

「主人公に、堂々と唯為理の写真を見せて」

この、ボブの子なんですけど。

こんな感じの子が最近この辺に遊びに来ていなかったって、聞いていただきたいんです」

〈主人公〉

「……………」

〈絢〉

「真剣に。嘘は一つも言っていない」

よろしくお願いしますね……。本当に、大切な人なんです」

もしかして、この人全部知ってるの？

わたしと唯為理ちゃんの関係、全部知ってて、わたしに声をかけてきたの？ で、写真見せてんの？

怖い。怖い。怖い怖い怖い。

濤に電話するのとは、比較にならない位怖い。
でも——……。

〈主人公〉

「——……はい」

SE7 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

SE8 主人公がカフェのドアを開ける音

【最初から最後まで流す】

SE9 主人公がカフェのドアを閉める音

【最初から最後まで流す】

SE10 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【0―5秒ほどまで流してSE12】

【その後、音量が小さくなる】

【その後、シーンが切り替わるまで流し続ける】

主人公、店の外まで出る。

そして、約束した通りスマホを手に取り――……。

SE11 主人公がスマホを操作する音

【SE3と同じ音】

【最初から最後まで流す】

SE12 スマホの発信音

【最初から最後まで流す】

〈おばあちゃん〉

「【方言。『遊ぶんでなかったのかい』は『遊ぶんじゃなかったの?』という意味】
もしもし? あんたどしたのー? 唯為理ちゃんと遊ぶんでなかったのかい?」

一度フェードアウトする。

二時間後。十七時ごろ、青柳家前の道。

SE13 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

【トラック終了まで繰り返し流す】

【0―5秒ほどまで流してSE15】

SE14 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

主人公が青柳家まで戻り、ガレージに駐車して玄関まで出てくると、なぜか佐智が待っている。

〈佐智〉

「お疲れ様です。おかえりなさい」

〈主人公〉

「佐智さん！ 来てくれてたんだ」

主人公、それを見て驚く。

まさか、佐智が来てくれているとは思わなかった。

いや、これも当然の措置だろうか。なぜなら……。

〈佐智〉

「主人公が元気そうなので安心する」
来ますよ。

「トーンが低い。真剣な様子で」

大丈夫でしたか。変な女に会ったって聞いたんで」

主人公、佐智がとても心配してくれているので、嬉しくなるとともに、心配させてはな

らないと強く感じる。

目の前で両手を広げて、ちよつとおどけてみせる。

〈主人公〉

「この通り無事です。……唯為理ちゃんは？」

〈佐智〉

「【すぐホツとして】

そっすか。よかった。

あ、唯為理は今編集さんから電話きちゃって、話しています。
一緒にお邪魔さしてもらってるんで大丈夫っす」

〈主人公〉

「そっか。よかった」

佐智、一瞬悩むが、切り出す。

〈佐智〉

「真面目な声で」

あの。お姉さんが会ったのって、茶髪のロングで髪巻いてて。

なんか、全身やったら高そうな格好の、お姉さんと同じ年位の女っすよね」

……やっぱり、佐智さんも知ってる人だったか。

〈主人公〉

「……うん。すごく羽振りがよさそうっていうか、身なりがよかった」

そう……あの人の格好は、このすずらん市で、おじいちゃんの車よりも浮いていた。少なくとも、雪だるまみたいな格好してる女とは、並べちゃいけないやつだったな……。

〈佐智〉

「少し早口になる。『やはり』と思っている」

で『絶対唯為理に会いたい』って感じだったんすよね」

〈主人公〉

「うん。なんか……唯為理ちゃんの恋人みたいな口ぶりだった」

〈佐智〉

「でもそいつ、唯為理は母方の孫だから苗字が違ふ事も、じいちゃんが亡くなった事も知らないし。

平日の昼間にフラッと現れて妙だから。

お姉さんは『これなんかおかしいんじゃないか』って思って、追っ払う事にしてくれたと。

【少し間をあけてから】

それで、青柳のばあちゃん呼んで。口裏合わせてもらって。

何とかごまかして、すずらん駅まで送ったと。これで合ってます?」

主人公が、佐智があまりにも事態を正確に理解しているので『この人ってやっぱり賢いなあ』と思う。

同時に、頼もしくなる。

もし佐智がいなかったら、自分は今晚、ずっと恐怖で震えて過ごしていたかもしれない。

〈主人公〉

「うん。そんな感じ。偶然車で来ててよかったよね。」

『ちようどそっち行くんで送っていきます』みたいな感じで追い払った」

〈佐智〉

「少しホツとするが、念を押す」

その後（あと）、ちゃんと帰った感じでした？」

〈主人公〉

「大丈夫。電車出るところまで見送ったから」

〈佐智〉

「すごくホツとする」

よかったあ……！

「声が明るくなる。主人公を心から褒める」

お姉さん、やるじゃないっすか！ こういうの何て言うんすか？

無血開城（むけつかいじよう）、みたいな？」

佐智、ここまでの話を聞いて、あからさまにホツとする。

先に帰ったおばあちゃんからも同様の説明を受けたが、主人公とおばあちゃんが別れた

後の事を、おばあちゃんが知っているはずもない。

だから事の顛末を、直接主人公から聞いて安心したかったのだ。

〈主人公〉

「開城できたかはどうかなあ……。

とりあえず、今は安心だと思うよ。唯為理ちゃんがうちに来てくれてるなら猶更。あーびびった。マジびびった。あの人、やっぱりなんかおかしい人なんだね？」

〈佐智〉

「一度はテンションが上がっていたが、主人公に怖い思いをさせた事に気づいてはは……そうっすよね。怖い思いさしてすいません。

【少し間をあけてから。真剣に深く頭を下げる】
ありがとうございました。

また助けてもらって、感謝してもしきれないっす」

〈主人公〉

「いえいえ。思うままに行動しただけです」

主人公『当然の事をしたまでです』と言いかけるが、すぐにこれは少しも『当然の事』ではないと思ったので、やめる。

だって本当に冷静な判断をするなら、あの時自分はおばあちゃんではなく、唯為理にかけるべきだったのだ。

唯為理に直接二人の関係を尋ねて、事の真相を聞き出すべきだったのだ。

それをしなかったのは、怖かったからだ。

唯為理の口から『はい。私は彼女とお付き合いしています』と言われたら、自分は間違いなく深く傷つく。

それを避けたかったから、主人公はあの女性を勝手に『おかしい人』認定して、追い払う事にしたのだ。

結果的には間違っていないなかったようだから、まだよかったものの……。
主人公は自分のこの行動を、とても『当然の事』だとは思えなかった。

……でも、あの人なんて電車だったんだろうな。この地域なら、車のが楽だと思うけど。
免許持っていないのかな。あ、雪道慣れてない地域の人なのかな。

そもそもあの人、何の仕事してるんだろう。

勤め人っぽいけど、金曜日の昼間にここまで来てるし。

いや、人の仕事を勝手に推測したり知ろうとしたりはいけないって、この前反省したばかりじゃないか。

……でも、やっぱりなんか変だったような……。わかんないけど。

〈佐智〉

「それでも、本当にありがたいっす。

【少し間をあけてから】

んであの。その人なんすけど。

【少し間をあけてから。結局やめる】

いや、あたしがあんましやべんのもよくないっすね。

【『唯為理から直接聞いて下さい』と言いかけて】

唯為理から」

SE15 唯為理の足音

【最初から最後まで流す】

【遠くからだんだん近づく】

すると、そこで唯為理がやってくる。

※声はだんだん近づいてくる※

【慌ててやってくる】

ごめんなさいお待たせしました……!」

主人公と佐智、そこで会話をやめて、二人とも唯為理の方を見る。
というか、うっかり玄関で話し込んでしまっていた事に気づく。

〈主人公〉

「唯為理ちゃん」

〈佐智〉

「おー。仕事大丈夫だった?」

【佐智を気遣って、できるだけ明るい声を出す】
うん。平気」

佐智、一瞬悩むが、主人公と唯為理を二人きりにしようと思う。
帰りはきつと、主人公が送ってくれるだろうし、自分が迎えに行ってもいい。

〈佐智〉

「落ち着いた優しいトーンで」

じゃああたし、先にうち戻ってるよ。

「少し真面目な声になって」

あの人の事は、自分で話しな」

「うん」

〈佐智〉

「【真剣に】

お姉さん、今日は本当にありがとうございました。

明日また改めてお礼さして下さい。

「【少し間をあけてから】

じゃあ、失礼します」

〈主人公〉

「うん。また明日」

「また後でね」

SE16 佐智の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかっていく】

佐智、そのまま目の前の公園を突っ切って、小湊家に戻っていく。

主人公と唯為理は、しばらくそれを黙って見送って、こうして青柳家の玄関には、主人公と唯為理だけが残される。

主人公、唯為理に何から話せばいいのかと悩むが——……。先に口を開いたのは、唯為理だった。

【落ち着いたトーンで、申し訳なさそうに】

あの……本当にありがとうございました。

嫌な思いをさせてごめんなさい。

【声がかすれる】

何てお詫びをしたらいいか、わからないです」

〈主人公〉

「ううん。平気。そんな事よりも……」

【落ち着いたトーンで。覚悟を決めている】

はい。だからせめて、あの人の事をお話しさせてくれませんか。
あなたには、知ってもらえたらって、思ってます」

〈主人公〉

「……わかった」

主人公『じゃあ、うち入ろうか』と言おうとするが、よく見ると唯為理は、なぜかコートを着ている。

【落ち着いて、自然に】

じゃあ、その公園で話しましょうか」

そしてそれから、話をする場所に公園を指定した。

一度フェードアウトする。

数分後。青柳家と小湊家の間にある公園。

主人公と唯為理、ベンチに並んで座って話している。

SE17 外の環境音

【SE14と同じ音】

【最初から最後まで流す】

【一度フェードアウトさせてから再度流し始める】

【その後、トラック終了まで流し続ける】

【落ち着いて。話す内容をあらかじめ、まとめてきているかのように】

あの人は衛藤 絢（えとう あや）さんという方で、私を応援してくれてる人です。

【少し間をあけてから。『リップ』は『リプライ』の略】

最初はSNSで知り合って。リップとかメールで、私の作品の事、話してくれて。……すごく。いい方だと思ってました」

〈主人公〉

「うん」

「でも、段々感じが変わって行って。

『ここはこうした方がいい』とか『あの作品はあなたらしくない』とか、そういうのが増えて。

【少し間をあけてから。少し声が震える】

でも、その位なら意見の一つかなって思えたんですけど。

【少し間をあけてから】

そのうち私が、他のファンの方や、作家さんと話してるのも嫌だっておっしゃるようになって。

【少し間をあけてから】

私、在宅のお仕事ですし、お仕事関係の方も、基本インターネット上のお付き合いなので。直接人と会って話す機会って、少ないんです。

【少し間をあけてから】

だからちよつと反応もらえるだけでも、嬉しくて。

同人活動も、SNSも。色んな人とお話できる、すごく大事な場所だったんです。

【悲しげに】

だから『それは認めてほしい』って、お願いしたんですけど」

……えっ？　ちよつとそれ、おかしいでしょ。

そんなの、他人に許可を求めるような事じゃないから。

事務所にSNSとか、接触イベント禁止されてる芸能人じゃないんだから！

唯為理ちゃんは自由に交流していいでしょ。……いいよね？

主人公、絢の行動が理解できず、発言したくなるが、話の腰を折るのはいけない。
ひとまず最後まで聞く事にする。

〈主人公〉

「それで……『喧嘩』？」

「【悲しげに。絢はあの件を主人公に『喧嘩』と説明したのかと思うと、ぞっとしている】

……はい。去年地元の即売会に出た時、衛藤さん来てくれたんですけど。私が他の人と話してたのが嫌だったのかな……。

衛藤さん怒って、騒ぎになっちゃって。

関係ない人にも迷惑かけちゃって。

【少し間をあけてから。申し訳なさそうに。当時を思い出して】

幸い、ちっちゃいイベントだったんで。

そんな、ネットで噂とかにはなかったんですけど。

ただ、地元の知り合いも巻き込んでしまったので。

おじいちゃんのお葬式の後、おばあちゃんも心配でしたし。

家族と話して、残る事にしたんです」

〈主人公〉

「初めて会った時、すごく怯えてたのも、何かを衛藤さんだと勘違いした？」

「そうです。

あの時は……初めてあなたと会った日は、ほんとに見間違ってたんですけど。散歩してたら、衛藤さんが近くにいますような気がして。怖くなって……。立てなくなったら、あなたが見つけてくれたんです」

〈主人公〉

「そうだったんだね……」

だから、初めて会った時、あんなに怯えていたんだ。

だから、佐智さんがやたらと過保護だったんだ。

だから、いくら在宅のお仕事とはいえ、おばあさんの件があるとはいえ、一か月以上も自宅に戻らずにずらん市にいたんだ。

主人公、すべてがつながり、納得するとともに――……。

絢に激しい嫌悪感が沸いて、さっきまで一緒にいた事さえ気持ち悪くなってしまう。

でもそれは、嫌な正義感だ。そもそも、正義感と呼ぶのかすら怪しい。

主人公はこの件に関して無関係だ。

だから唯為理と佐智、二人からの情報と、自分が絢と過ごした短い時間だけを判断材料に、絢を悪人とみなし、敵視している。そんな不公平な状態にある。

もし主人公が『絢は嘘をついていて、唯為理が真実を話している』と思うなら。

それでも、『できるだけ公平に判断したい』と思うなら。

主人公は『唯為理は嘘をついていて、絢が真実を話している』可能性も疑うべきだ。
なのに主人公は、それを微塵も疑っていない。

唯為理が好きだから、唯為理の言葉だけを信じて、唯為理の味方になろうとしている。
これは、ちっとも公平でも冷静でもない。

「はい。」

【長めに間をあけてから】

こつちに来て、色々考えました。

本当は私が全部悪くて。

【ふり絞るように】

謝って、許してもらうのがいいのかもしれないって。

自分の事好きだって言ってくれる人がいるんだから、その人を大切にして。
言う通りにするのがいいのかもしれないって。

【少し間をあけてから。悲痛に】

でも。

【少し間をあけてから。涙声で】

そうしたら。心が死んじやう気がした……。

【泣きながら】

私が私じゃなくなってしまう気がしたんです」

〈主人公〉

「そっか……」

主人公、目を落とし、大きく息を吸って、吐いて、これから自分がどうするべきか考える。

自分は憧れの彼には程遠いが、それでもその真似はできる。
それは——……。

【泣くのをこらえて、できるだけ落ち着いて話そうとする】

はい。これが、私がこの町に来た理由です。

【心から謝る】

もう誰も巻き込んだんじゃないかって思ってたのに、本当にごめんなさい」

〈主人公〉

「ううん。唯為理ちゃんは正しいよ。正しい事をしたんだよ。」

あなたが間違っている所なんて一つもない」

「驚いている。予想外の言葉で」
えっ？」

主人公は決める。

自分はこのまま、主観を貫くと。

絢は正直に言って、唯為理の事を大切にしているようには思えなかった。

正確には『本人は大切に行っているつもりである』可能性はあるが『客観的には、とてもそうは見えなかった』というところだろうか。

だから、主人公としては、とても好感が持てる相手ではなかった。ていうか大っ嫌いだ。もう一度現れたら、絶対に通報してやろうと思っている。

だが、唯為理にとっては、単純に嫌える相手というわけでもないらしい。

だったら、今自分がすべき事は、絢を批判する事ではない。唯為理を励ます事だ。不当な扱いを受けて、自分に自信をなくしている唯為理の力になる事だ。

主人公、涙を流す唯為理を見て、思わずその小さな手を握りたくなるが――それはせずに、続ける。

〈主人公〉

「逃げてよかったんだよ。

衛藤さんから逃げて、ここに。ずらん市に来てよかったの。わたしが保証する。だって唯為理ちゃんには、自分の心を守る権利がある。

相手の気持ちなんて関係ない。

自分の心が死んじやいそうになる相手と、一緒にいる必要なんてない。

唯為理ちゃんは、唯為理ちゃんがしたいと思う事をしていいの。

わたしはいつでも、それを応援するから」

「涙があふれてくる。主人公の言っている事が信じられなくて、復唱する。でも、嬉しい」

私は、私がしたいと思う事を、してもいい……？」

〈主人公〉

「そうだよ。わたしが絶対に味方になるから」

主人公、そう言いながら、自分の言っている事は矛盾していると理解している。なぜなら自分は今、自分がしたいと思っっている事をしていないからだ。

ああ、今、唯為理ちゃんの事、めっちゃ、ぎゅってしたい。

強く抱きしめて『だから、わたしと一緒にいよう』って、『次は、衛藤さんが見当もつかない場所に、一緒に逃げよう』って言って、唯為理ちゃんが『はい』って言うまで離したくない。唯為理ちゃんの事が好きだから、それを、もっとはつきりと伝えたい。

……でも今それをするとか、卑怯者にもほどがあるでしょ。

衛藤さんの件を使って、唯為理ちゃんに言う事を聞かせようとするなんて。

自分の正しさを押し付けるなんて、衛藤さんと、やってる事何も変わらないじゃない。

【涙をこらえて】

ありがとうございます。

あなたは、本当に、優しいんですね……。

【長めに間を空けてから】

私、きつと

【『あなたに会うために』と言おうとして、やめる】

あなたと過ごす為に、ここに来たんですね。

【長めに間をあけてから。落ち着いてお礼を言う】
本当に、お世話になりました」

〈主人公〉

「えっ……？」

唯為理、その時、主人公の顔が大きくゆがみ、今にも泣き出しそうになるのを認めるが、それでもひるまずに続ける。

もう、どうするべきかは決めていたのだ。

だから、外はこんなに寒いのに、青柳さんちではなく、公園で話す事にしたのだ。

【「落ち着いて、きっぱりと」

明日、ここを出て行きます。

こっちには家族も、あなたもいる。

衛藤さんが来てるってわかった以上、またご迷惑はかけられません。

【少し間をあけてから。残念そうに】

予定より早くなっちゃったのは、残念ですけど」

唯為理、思う。

そう。私は私に、わかってもらわなくちゃ。

この人は私の事なんて好きじゃない。好きじゃない好きじゃない好きじゃない。

誰にでも優しくして親切で、もし別の人が同じ目に遭っていても、必ず助ける人なの。

だから、これ以上好きになっちゃいけない。迷惑かけちゃいけない。期待しちゃいけない。依存しちゃいけない。甘えちゃいけない。

これ以上一緒にいちゃいけない。この人の人生に、私はいらない。

〈主人公〉

「……急、すぎない？」

「【申し訳なさそうにしつつも、迷いなく】

ごめんなさい。でも、決めました。

私は衛藤さんに思っている事が言えません。会えばきつと、彼女のペースになります。

【落ち着いて】

でも、もう言いなりにはならない。

だから会いたいと言われても会わないと、決めました。

そんな私の都合に、誰かを付き合わせたくはないんです」

主人公、唯為理の言葉を聞きながら、いくつもの言葉を飲み込む。

“嫌だよ。付き合わせてよ”

“わたしをその、逃避行の仲間にしてよ”

“ここでお別れなんて嫌”

“だってわたしは、唯為理ちゃんの事が——……”

なぜなら、主人公はつい先ほど、唯為理の意思を尊重すると言った。
だからそれを撤回するような事はできないと思ってしまったのだ。

〈主人公〉

「……お別れ会も、できないじゃん」

「申し訳なさそうにしつつも、迷いなく」
はい。

【少し間をあけてから。わざと明るく】

でも、ずっと会えなくなる訳じゃありません。約束、もう忘れちゃったんですか？」

主人公、うつむいて泣きそうになりながら、ぐっところえて顔を上げる。

だって今、唯為理との恋が終わった事がわかった。

唯為理はきつと、約束を守らない。

このまま、絢の前からも、自分の前からも姿を消すだろうと、わかってしまったのだ。

〈主人公〉

「……そうだったね。」

じゃあ、わたしがやりたい事を見つけれたら、その時はまた会ってくれる？」

【明るく】

もちろんです。あなたがやりたい事を見つけれられた時。その時はお祝いです。

私、待っていますから」

〈主人公〉

「ありがとうございます」

主人公、唯為理の嘘に嘘で返しながら、さつき唯為理を抱きしめなかった自分には、もはやそれを責める権利もないのだと気づく。

このまま何も気づかない、まぬけな友人のふりをして、彼女を見送るしかないのだと思う。

〈主人公〉

「じゃあ、友達として。明日、出ていく時は、駅かな？　そこまで送っていくよ」

「わかりました。」

じゃあ明日、始発に間に合うように、駅まで送っていただけですか」

〈主人公〉

「五時半くらいがいいかな？」

「ありがとうございます。じゃあ、五時半にここで待ち合わせしましょう」

SE18 唯為理がベンチから立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

ここで唯為理が立ち上がり、主人公は『もうこれで話は終わりだ』と言われた気持ちになる。

それでもまだ、一緒にいたかった。

たとえば、もう少しだけ一緒にいられたら、まだ何かを変えられるかもしれない。もう少しだけ話せたら、もう一度気持ちを伝える機会が得られるかもしれない。そう思ったが……。

〈主人公〉

「……そしたら、うち戻ってご飯にしようか。

つつても、おばあちゃんが作ってくれるやつだけど……今日はシチューが」

【申し訳なさそうにしつつも、迷いなく】

ごめんなさい。ご飯は家（うち）で食べます」

だけど唯為理は、主人公のそんな小さな望みさえ断ち切っていく。その迷いのない姿は、もう、出会った頃とはまるで違っていた。

「【申し訳なさそうに。嘘をつく。さっきまで編集と電話していた事を利用する】
原稿、直す所があつて。

明日は作業できないから。すぐ取り掛からないと」

〈主人公〉

「……だったら、送る」

「【すごく嬉しいのに、やんわり断る】

いえ。すぐそこですから。一人で帰ります」

〈主人公〉

「でも」

主人公の言葉に、唯為理は小さく首を振る。

これからどうするべきかは、もう全て決めているようだった。

「わざと明るく」

じゃあ、ここから家に入るまで、見ていて下さい！」

——ああ、これで終わりなんだ。

わたし、唯為理ちゃんにはもう会えないんだ。

主人公、別れを悟り、ベンチに座ったまま唯為理を見上げる。

今日が終わりになるなんて、少しも思っていなかった。

ほんの数時間前は、明日も、明後日も、望めばいつだって、その手に触れられると思っていたのに——……。

〈主人公〉

「……わかった。また明日ね」

SE19 主人公がベンチから立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

主人公がベンチから立ち上がると、唯為理は一步離れた。

それに、やんわりと拒絶された気持ちになって、主人公は動けなくなる。今手を伸ばせば、間に合ったかもしれないのに、できなかった。

「【わざと明るく】

はい！ また明日。

【まるで『さよなら』と言うように】

本当にありがとうございました」

〈主人公〉

「じゃあ……おやすみなさい」

SE20 唯為理が歩き出す音

【最初から最後まで流す】

主人公、自宅に向かって歩き出す唯為理を、ただ遠くから見つめる。その距離はほんのわずかなのに、どうしても越えられず、近寄れない。

唯為理、一度立ち止まる。

※少し声が遠い※

「まるで『さよなら』と言うように」
「おやすみなさい」

薄闇の中、唯為理が振り向いて、小さな声で言った。

でもすぐにまた前を向いて、そのまま振り返らずに小湊家へ戻っていく。
やがて小湊家にたどり着くころには死角になって、見えなくなってしまう。

それを――……主人公はずっと立ち尽くしたまま見ている。

SE21 唯為理が歩き出す音2

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかってフェードアウトする】

ここでフェードアウトして終了。